

研究ノート

## 長野パラリンピックの舞台裏

—地元放送局の視点 村山隆氏（元信越放送）インタビューより—

富田 幸 祐（オリンピックスポーツ文化研究所）  
津田 博 子（スポーツ文化学部／身体教育系）  
松本 真 咲（体育学部／身体教育系）  
齋藤 雅 英（スポーツ文化学部／教育福祉系）

### はじめに

本稿は第7回パラリンピック冬季競技大会（以下、長野パラリンピック）開催時に信越放送株式会社（以下、信越放送）に勤務し、長野パラリンピックに関わった村山隆氏のインタビューを基に作成したものである。インタビューは2019年2月25日に信越放送本社にて行った。なおインタビューの実施に関しては、日本体育大学倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：019-H082）。

### 1. 村山氏と長野オリンピック放送の関わり

長野がオリンピック招致に名乗りを挙げたのは、1985年のことであった。その後、盛岡、山形、旭川といった都市を抑えて国内候補地に選ばれ、招致活動が本格的にスタートする。そして1991年の第97次IOC総会（バーミンガム）にて、第18回オリンピック冬季競技大会の開催地に長野は選ばれた。その頃、村山氏は信越放送の制作部に所属し、主にテレビ番組の制作に関わっていた。村山氏は国内候補地決定の際も、IOC総会での招致決定の時も現地にいたわけではなかったが、この頃からオリンピック関連の番組制作の「ほとんどのもの」に関わっていたという。40歳ぐらいだった村山氏は当時の自らを「一番使い勝手がいい世代だったと思います」と振り返る。

長野オリンピックでは、長野オリンピック組織

委員会（以下、NAOC）にOlympic Radio Television Organization '98（以下、ORTO）が設置された。ORTOにはNHKや日本民間放送連盟（民放連）からスタッフが派遣され国際信号の制作を行っていた<sup>1)</sup>。この国際信号の制作は、NHKをはじめとする放送局毎に競技の放送担当を割り振って行っていたが、その内、表彰式会場<sup>2)</sup>を長野県内のNHKと民放4局による5社共同で制作することになる。地元放送局の共同制作となったことに対し村山氏は、表彰式会場が最後に残ったから、NAOCから地元放送局に依頼があった、ORTOに関わっていたNHKや在京キー局といった「中央のところに[話が]一筆者注]上がってきた」などその理由を語ってくれた。そしてこの表彰式会場のプロデューサー、番組制作の責任者になったのが村山氏であった。

地元放送局5社から動員されたスタッフは総勢で30名ほどであった（表1）。村山氏が所属していた信越放送はNHKと共に制作担当になり、その他の各社は、カメラマンや音声関連スタッフを供出した。責任者となった村山氏は関係会議などへの出席をしつつ会場での放送準備を行い、1998年1月からは表彰式会場に通い詰めとなり、オリンピック期間中は、毎日のように表彰式の国際信号を制作し、世界に送り出していた。

表1 ORTO表彰式スタッフ一覧(1997年12月1日現在)

役割	氏名	所属
ベニューマネージャー	田中 良彦	SBC(オリンピック事務局)
テクニカルベニューマネージャー	本間 吉隆	NHK(放送センター)
ベニューマスター	泉本 貴広	NHK(放送センター)
ベニューマスター	小川 和男	NBS(技術部)
A・ベニューマネージャー	北沢 吉久	SBC(映像ネットワーク)
リエゾン・通訳	和田 順一	SBC(信州大)
プロデューサー	村山 隆	SBC(制作部)
ディレクター	春原 晴久	NBS(制作部)
アシスタントディレクター	菅谷 敦	NHK(放送センター)
アシスタントディレクター	山下 千帆	ABN(制作部)
テクニカルディレクター	堤 啓治	SBC(テレビ制作技術部)
プログラムスイッチャー	飯沢 崇	SBC(テレビ制作技術部)
ビデオエンジニア	北原 安	SBC(テレビ制作技術部)
1C	宮本 哲也	NHK(ミヤテック)
2C	関 勝志	NBS(技術部)
5C	山田 和久	NBS(八峯テレビ)
3C	若林 博之	TSB(長野映像センター)
4C	佐藤 敬	ABN(技術部)
VTR	百瀬 隆裕	NBS(技術部)
ミキサー1	北田 稔明	SBC(アクテック)
ミキサー2	稲村 由香里	NHK(アクテック)
ラジオミキサー	宮沢 拓朗	SBC(アクテック)
カメラアシスタント5C	宮寄 芳之	SBC(アクテック)
カメラアシスタント3C	佐藤 陽	TSB(長野映像センター)
カメラアシスタント3C	高橋 恵樹	TSB(長野映像センター)
カメラアシスタント4C	松永 真紀子	ABN(技術部)
庶務	長谷川 昭	SBC(経理部)
クレーンオペレーター	長島 直和	明光セレクト
クレーンオペレーター	渡辺 篤雄	明光セレクト
クレーンオペレーター	向井 孝頼	明光セレクト
SBC=信越放送、NBS=長野放送、ABN=長野朝日放送、TSB=テレビ信州		

村山隆「スタッフ表④」『OLYMPIC (ORTO)』を基に作成.

## 2. 長野パラリンピックとの関わり

村山氏の長野パラリンピックとの関わりは94年ごろからであったという。「当時は私が1人でほとんど関わっていろいろ作った…ほんとありとあらゆるパラリンピックに関しては作りました」と言い、そのきっかけについてこう語る。

オリンピックっていうのはある面ではマーケ

ティング的にもがちがちに縛られてて、一(いち)ローカルの放送局が口出すなんてほとんどなくて、今回の長野の時のそういう表彰式とかそういう共同制作分ぐらいしかなかったんですが、パラリンピックは当時なんにもなかったんですよ。非常に緩い組織で、オリンピックのNAOCに対してNAPOCっていう組織、ご存じだと思いますけど、長野県の職員と長野市、開催市町村の職員なんか中心、あと民間も入って作られてて、そこ

へ何とかビジネスチャンスにしろという話がありましておまえ企画書作れと。

村山氏は企画書を作成すると、長野パラリンピック組織委員会（以下、NAPOC）に売り込みに行った。すると企画はNAPOCに採用されたのである。最初の企画は、日本のパラリンピックの現状や大会会場のことなどを紹介するプロモーションビデオの作成であった。この映像は国際パラリンピック委員会（International Paralympic Committee：以下、IPC）の総会で用いられたものだという。

素材集めから始めました。最初にやったのは長門町かなんかのスキー場へ行ったりして、そういうもの撮ってきて、今度は英語版作ります。じゃあ、英語版も作ってくれ。じゃあ、次はこんな施設の紹介も作ってくれ。要するに組織委員会がIPCへ報告したりするときに持っていくものでこういうものが必要なんだけど、っていうふうに言われる。じゃあそれ作りましょうってやっていった形でした。だから放映権がうんぬんとか、うちも独占するつもりもなかったですけど、多分放映権なかったと思いますね。

この映像制作を皮切りに村山氏はいろいろな提案をNAPOCに対し行うことになる。「映像を取って来いといわれ、こういう企画をやります、信越放送でもできますけどどうしましょう」と考えつくあらゆるコーディネートを行い放送以外の仕事もとってきていた。「だからパラリンピック組織委員会と一番関わっていたのは多分私です」と村山氏は語ってくれた。また村山氏は、オリンピックの番組制作に関わる中で学んだノウハウをNAPOCに提供していたという。例えば招致活動やプレゼン映像は長いものは作ってはいけない。

大体人間が招致活動とかプレゼンで見せられる長さって、長くて8分ですよ、っていうことも

[NAPOCの関係者は]知らなかったですから。

招致活動のプレゼン映像の他にも、長野県内の小中学校に周知するための配布用映像の作成なども行っていたという。村山氏はNAPOCへの協力を惜しまなかった。その代わりに撮影した映像は同時に信越放送でも自由に使用させてほしいという形で交渉を行っていたと語る。こうして村山氏は、大会だけでなく総会・ジャパンパラリンピックプレ大会等関連行事も含めて取材を重ねた。NAPOCが全面的に協力してくれたことで、海外取材以外は希望したありとあらゆることが取材撮影でき、基本的にできなかったことはなかったという。

パラリンピックのほうに関しては全くノーケアでしたから、なんでもできるっていうか、大体ほとんど皆さん関心なかったですよ。

### 3. パラリンピックの放送について

信越放送にはニュースと制作合わせ、最大で14、5クルーがあり、取材体制は手厚く整っていたが、デイリーニュースを含め他の番組の準備もあったため、当然そのクルーをパラリンピックに全部出すわけにはいかなかった。そのためパラリンピックではクルーを絞って取材撮影を行っていた。信越放送ではパラリンピックに関わる放送は、毎日の夕方のニュースで取り上げ、競技2つ、3つを10分から15分ぐらいの時間で放映していたという。放送内容は毎日異なるので、取材撮影しながら内容を考えていた。また時には、オリンピックほどではないがTBSの応援が入ったという<sup>3)</sup>。ただ、今と比較すると応援もそんなに多くはなかった。クルーを絞ったため撮影できなかったものもあるが、放送上の支障はそんなになかったという。大会期間中の放送体制に関しては、メダルが取れそうな競技は手厚くし、その他ホッケー、スピードレースには中継車を入れた。

アイスホッケーなんて撮ろうと思えば3台あれば撮れますから、引きと寄りがあれば撮れます。というような形で行けば、屋内競技は中継車2台入ってて、あとは外の競技が中心でやりくりしてくと意外と何とかなったんですね。多分欲しいところもあったりしましたが、何しろ長野の頃は種目数が多かったですよね。知的障がい者の競技まで全部あって、ありとあらゆるメダリストの数でいけばとんでもなく多かったと思うんですよ。競技もいっぱいありましたし。

土地柄、信越放送のクルーには屋内競技やアルペンスキーについては放送知識があった。ただクロスカントリーやあまり日本選手が活躍しない競技の時は大変だったという。こうした経験は村山氏たちにとって、長野パラリンピック以降にスポーツ大会を放送する際の糧となったという。

大体そうは言っても何となく分かってくるじゃ

ないですか。雪もの<sup>4)</sup>なんかは長いスパンで撮れるところに絶対カメラ置こうとか、そのノウハウなんかは結果的に生きて、うちなんかはオリンピックの3年後、ワールドカップの大回転までやりましたから。日本のローカル局で大回転のワールドカップ中継したことあるのって、うちの会社だけですから。

ただパラリンピックは単体で放送時間を確保して中継することができなかった。その為、午後帯のワイド番組の中に中継を入れ込むという形で放送を行ったという。アイススレッジホッケーの決勝戦も放送はしたがそれだけの放送枠を作ることは出来なかったという。これはセールスの的に成り立たなかったためではないかと村山氏は語る。確かに村山氏の放送計画に関するメモを見る限り、テレビで、アイススレッジスピードスケートやアイススレッジホッケーの中継は計画されているが「生」の文字は連ねていない。ラジオでは開会式の生中継を計画していることから、やはりテレ

表2 信越放送のパラリンピック放送計画案

メディア媒体	番組タイプ	放送枠または内容
テレビ	レギュラー番組	ニュース
		パラリンピック夢パーク
		ほっとスタジオSBC通り
	中継	開会式
		アイススレッジスピードスケート(100m、500m)
		アイススレッジホッケー
		閉会式
	SBCスペシャル(20時~21時)	開会式、前半戦
総集編		
ラジオ	レギュラー番組	ニュース
		午後ワイド内
	生中継	開会式
	特番	総集編

村山隆「放送計画」『PARALYMPIC』を基に作成。

ビでは単体での生中継は実施されなかったのだろう（表2）。

なおパラリンピックの閉会式はNHKがテレビで生中継しているが、その出来事について次のように述べている。

NHKが主導権取ろうとしてきたんですけど、それはそれでやってください。だから、うちうちで記録するから、カメラ入れますよと。ゴールのところは重なると大変なんで、中継NHKだけにしてくれないかと頼まれたけど、とんでもない話だと。うちは組織委員会から許可もってるんだからそんなわけにはいきませんよと。おまえら絶対負けるなって。

#### 4. パラリンピックの放送コンセプトについて

パラアスリートに対する取材は、番組制作の関係で、いろいろな選手を対象としていたという<sup>5)</sup>。継続して取材していた中で、特に印象深い選手として長野出身のバイアスロン小林深雪さんとアイススレッジスピードレースの加藤正さん2人を村山氏は挙げる。どちらも長野県出身であり、二人を取り上げる番組が決まった1995年には、1年に渡って継続取材を行った。

パラリンピックの取材や撮影に際し、村山氏のコンセプトは「スポーツとして捉えましょう」ということであった。

これ[パラリンピック]はスポーツですと。[パラリンピアンは]アスリートですと。今は当たり前のように言われてますけど、だからそういうスタンスにしましょう。同情とかそういうものは一切止めましょうと。というのが多分うちの社としての、掲げてるわけじゃありませんけど、それがスタンスでした。

「障がい者スポーツ」はスポーツには違いはないが、現在とは違い、「身体なり何なりに障がい

を持つての人が頑張る姿を応援しましょう」というイメージが強かった。パラリンピックを「スポーツ」としてパラリンピアンを「アスリート」として捉えるというコンセプトについては、日本障がい者スポーツ協会の当時責任者だった三村一郎氏に東京まで会いに行き「いろいろな話」をして相談に乗ってもらったという。またNAPOCとの打ち合わせでも「うちではそういう形でスポーツの競技として捉えます」と話したところ、NAPOCは「ぜひそうしてくれ」との回答であったという。またパラリンピックの取材では実際にスタッフに競技を体験させたこともあったという。

よく取材してそういう体験もさせましたし、やったらどうなるんだとおまえらやってみると、かつて番組を作ったこともありますし、だって目つぶってどうやったらアルペンできるんだって。視覚障がい者の。絶対に怖くて動けないですから。

取材や撮影を重ねるだけでなく、自分達でも体験をすることでパラリンピックが「スポーツの祭典」であることを実感していったのである。この捉え方は結果的に良い方向へ進み、現在の「障がい者スポーツ」の認識の基礎を築き上げたといっても過言ではない。現在では当たり前のように、健常者のアスリートと共にパラリンピアンがCMに登場する時代になったが、当時としてこれはかなり画期的なことであったといえよう。

#### 5. 長野パラリンピックにおける式典について

長野パラリンピックでは総合プロデューサーに久石譲氏を選ばれている。久石氏は長野県中野市出身であり、久石氏の選出は長野県出身で文化的にも理解があるためではないかと考えられる。そして久石氏の演出のもとで、開会式では「野沢の火祭り」<sup>6)</sup>が用いられたが、この案を持ち出したのは村山氏であった。

パラリンピックの開会式の野沢温泉の火祭りの神殿の案を出したの私です。なんか火を使いたいと、それだったら面白いのありますよ。野沢の火祭り面白いですよって。あの頃、久石さんが総合プロデューサーみたいな形で入ってましたよね。

お茶飲み話みたいなのをしてる中で、野沢の火祭りって面白いですよって。神殿組んで燃やしちゃうんですけど、じゃあ、見に行きましょうかって。寒い中、久石さんも一緒に行って、組織委員会とそれこそさっき言った伊原さん<sup>7)</sup>だの三宅さんだの、10人ぐらいで見に行って、僕らもそれ記録で収めますからって、であれがメインのコンセプトになったのだけは覚えています。

野沢温泉村はオリンピック開催地の一つとなっていたので、見に行く段取り等は村役場に対し県を通して了解を取り付け、スムーズに視察は行われたという。1996年1月17日の『信濃毎日新聞』には、久石氏が「野沢温泉村の『道祖神祭り』(国の重要無形民俗文化財)を開会式に取り入れたい、と構想の一端を明らかにした」ことが報道されている<sup>8)</sup>。この構想の発端となったのが村山氏であった。

閉会式では、平安時代末期から室町期まで行われていた田楽という芸能をベースとした大田楽が実施されたが、この演出は野村万之丞氏によって行われたものであった。村山氏は万之丞氏が、狂言の野村万蔵一家だということは知っていたというが、閉会式の演出の一部が大田楽に決まった経緯については知らないという。その言葉を聞いたのは、閉会式での大田楽の実施が決まって間もなくのことであったと記憶しており、「大」がつくから普通の田楽よりよっぽど規模が大きいのかというくらいの知識しかなく、後になって田楽という芸能は途絶えていて、万之丞氏が田楽として復活させたという話を聞いたという。なお村山氏の1997年12月9日付のメモに「大田楽をモチーフにした演出プラン」と閉会式について説明がな

されている<sup>9)</sup>。また番組に万之丞氏に出演してもらい駅前広場で「大田楽」の踊りの一部を披露し中継を行ったこともあったという<sup>10)</sup>。万之丞氏は弟子の方々と総勢40～50名の団体であった。宿泊施設の確保に苦慮していたので須坂市の「古城荘」という古い温泉宿を紹介したという。毎日温泉に入れたと感謝されたことを覚えていると語る。

式典に関わって、久石氏や万之丞氏から放送にあたってのリクエストは全くなかったという。信越放送では決められたプログラム通りのことをやっていただければいいということだけで、特別にそのときに何かを仕込むなどはなく、ありのままのものを撮るという体制であった。台本をもらい、その通り映像を収めていくという形であった。

なお村山氏は個人の見解としてパラリンピックは閉会式がよかったと述べている。

パラリンピックは閉会式がよかった。これは番組最後に編集してて、なかなか切れなかったんですよ。エンドレスに続いていくようなイメージがありまして、ただの閉会式じゃなかった。

とはいえ、村山氏はあまり閉会式当日のことは憶えていないという。1998年に入り、オリンピック、パラリンピックが立て続けに開催される中、総集編の番組作成をした3月20日ごろまで、オリンピック終了後に1日だけ休んだ記憶があるというが、あとは働きっぱなしであった。特にパラリンピック閉会式前後は、パラリンピック総集編の作成に追われていた。

閉会式やってる間から編集してるんですよ。14日がパラリンピックの閉会式でその前の13日から編集に入って、閉会式見ながら編集やって、その次の日まで編集やって16日に完成させて、17日にオンエアしてます。だから、この間4日ぐらいはなんにも寝てなかったと思います。

## 6. なんでも屋の信越放送

地元の話にも詳しくあったため、信越放送は便利な存在であったのではないかと村山氏は語る。例えば着ぐるみを作りたいけど着ぐるみの業者を紹介してほしい等、何かあれば頼りにされていた。主体が県と長野市中心であったため、現在とは違いイベント関係にほとんど慣れていなかった。そのためにパラリンピックに関わってNAPOCのいろいろな相談に乗っていたという。そのことも相まって信越放送は番組制作だけでなく出版物の制作においても協力をした。このことは村山氏も大変驚いたというが、パラリンピックに関するガイドブックや公式写真集の作成を信越放送の出版部門が行うことになった。

びっくりしたのは[長野パラリンピックには]新聞社とかも当然関わってるんですね、皆さん。そこをさしおいて、ガイドブック作らしてくださいっておまえ言ってこいって言われてうちに作らしてもらいましたから。最後の公式写真集もうちが出していますから。だから行けば、話をすれば通りました。どうしてか分かんないです、私も。だからそれだけいろいろな形で常に基本的には僕らのスタンスもそこで儲けようというよりも一緒にやっていこうっていう姿勢が評価されたんじゃないのかなとは思っています。

信越放送は出版関係が活発で本の出版、画集も含め行っており、長野オリンピックに関連して『聖火は朔風に揺れて』という本も出版していた。こうした背景として村山氏は、この頃信越放送はラジオとテレビにプラスして事業、いわゆるイベントやコンサート、美術展開催も活発であったことを挙げる。例えば信濃美術館への東山魁夷氏の寄贈にも信越放送は関わっているという。今は建て替えられてしまったが信濃美術館も信越放送が創立15周年を記念して寄贈したものであったという。

## 7. 長野パラリンピックの開催を経て

前述した通り、村山氏が今でも鮮明に覚えていることに、バイアスロンの小林深雪さんの事がある。小林さんはメダリスト候補であったため、密着取材を重ね、ずっと担当を張り付けていた。小林さんはバイアスロンで金メダルを獲得している。小林さんは優勝直後、ミックスゾーンに現われると、いち早く駆け寄っていったのが、入口で待っていた信越放送の女性記者であった。村山氏は取材にあたって「とにかく人間関係を作れ」とスタッフに話していたという。信頼できる人間関係を作っておくと選手は絶対にいろんなことを話してくれる。小林さんが駆け寄ってきたこのシーンは、その人間関係が生きた瞬間であった。アイススレッジスピードスケートで今でも長野で活躍している加藤正さんも長野パラリンピックで密着取材を行った一人だが、取材を通して加藤正さんといまも友人関係が続くスタッフもいるという。人間関係は関係取材を行ったひとりひとりの財産になって人とのつながりをつくっていった。密着取材は人間関係が築かれる場といえるのである。

その他、パラリンピックに多くの観客が押し寄せたことも驚きであったという。

とにかくパラリンピックのときは、最初は一部完全にチケット売れたわけじゃなかったですからね。オリンピックの熱で一気に売れて、今でも覚えているのがアイスホッケーのB会場だった、東和田に今プールになってるところなんですけど、パラリンピックはビッグハットを使えない。大きすぎるってアイスホッケーのB会場でホッケーやったんですよ。そこの仮設のスタンドが、床が抜けそうだって言っていましたから。組織委員会の人間が、行ったら心配なんだって。床が抜ける寸前だっというくらいにすごかったですから。

長野オリンピックの熱狂の後押しを受けたのは観客動員だけではなかった。長野県では現在でも

長野オリンピックから続くボランティアが活発である。例えばエムウエーブのスピードスケート会場のボランティアが中心になって組織された「エムウエーブ友の会」というものがあるが、いままも新メンバーが加入しながら、ワールドカップや全日本クラスの大会が開催される時にボランティア活動が行われている。この長野オリンピックのボランティアは一定数がパラリンピックでもボランティアを行ってくれたという。

## おわりに

長野オリンピック・パラリンピック開催後、長野では特集番組の放映が1, 2年後まで行われた。しかし番組内容はオリンピックだけでパラリンピックはなかった。

村山氏は長野オリンピック開催の際に地元放送局に任された放送エリアの責任者であった<sup>11)</sup>。しかし、パラリンピックでは、その多くを任される立場となっていた。ニュースや番組の制作、出版の折衝、そして式典の参考となるような案を提示するなど地元放送局に務めるという利点を活かして、NAPOCに積極的に関わっていた。話の限りでは村山氏はディレクションというよりプロデューサー的な仕事もされていたようである。

オリンピックもパラリンピックも総集編だったり、事前番組を制作し配布したのものもあるというが、なかには配布もせず、そのまま放映されなかったり、素材のままに残ってるVTRもかなりあったという。オリンピック・パラリンピックで村山氏が直接関わった分だけでも結構な分量の映像があった。最終的に編集し完成したものは、マスターテープを組織委員会に納め、複製や映像素材は、全部残していたという。映像はNAPOCが無くなる際に上駒沢のリハビリセンターに保管が移ったという話を聞いたそうだがその後どうなったかはわからないようだ。

長野パラリンピックがパラスポーツに対する見方を変えるきっかけであったと言われる<sup>12)</sup>。その

関心が日本全国に広がりを見せ、特にパラアスリートへの関心や期待、そして何より意識の改革につながったとされる。その映像の撮影、編集に地元放送局である信越放送に務めていた村山氏は携わっていた。こうした映像を発信し続けられたことが国民のパラアスリートのみならず、身体に障がいを持つ人々への意識に変化をもたらすきっかけとなったのだろう。

お忙しい中、快くインタビューを引き受けてくださった村山隆さま、そして村山さまをご紹介してくださった宮川伊都子さまに心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 室井謙三「長野・冬季オリンピックの放送システム 放送システムの特徴」『映像情報メディア学会誌』第52巻第6号、1998年、pp. 766-767.
- 2) 長野オリンピックでは表彰式の会場が長野市中心街の善光寺通り沿いに設置された。現在は長野オリンピックの記念施設としての性格も保持しつつ公園として整備され、セントラルスクウェアと呼ばれている。
- 3) 信越放送はTBS系列である。
- 4) アルペンスキーなどの雪上競技のことを指す。
- 5) なお村山氏が作成した取材候補リストには9名のパラアスリートが挙げられている。村山隆「パラ取材候補リスト」『PARALYMPIC』.
- 6) 野沢温泉道祖神祭り（野沢の火祭り）は日本全国で行われる「どんと焼き」の一つであり、国の重要無形民俗文化財である。20メートル近いブナの木から社殿を作り焼き上げるスケールの大きさから日本三大火祭りの一つとして数えられることがあるという。
- 7) 伊原義文氏のことを指す。伊原氏は長野県庁の職員でNAPOCの事務局次長を務めていた。伊原氏については、富田幸祐・斎藤雅英「長野というパラリンピック経験：伊原義文氏に



聞く』『オリンピックスポーツ文化研究』第5号、2020年6月、pp.179-190を参照。

- 8) 「パラリンピック開会式『野沢の火祭り』採用久石さん構想の一端明かす」『信濃毎日新聞』1997年1月17日付朝刊3面。
- 9) 村山隆「12／9 MEMO」『PALALYMPIC』。
- 10) 信越放送では、長野駅東口にサテライトスタジオを建て、オリンピック・パラリンピックのゆかりの人を毎週金曜日に呼んで、15分ぐらゐの番組を制作していた。
- 11) なお、村山氏はオリンピックに関して、長野オリンピック開催がもたらした余剰金がオリンピック・ムーブメント推進協会という組織の設立につながったことを語ってくれた。

そこ[オリンピック・ムーブメント推進協会]が勸進元になっているいろいろなスポーツの大会にみんな協賛金出してたんですよね。そんなことがあって、長野県ってスキースキーのワールドカップだとかスケートのワールドカップ、フィギュアだとかいっぱいあったんですよ。箱もありましたから、施設も。うち散々やりました。スキースキーのワールドカップはやったし、ジャンプは10年くらいやっ

たし、アルペンもやったし、フィギュアのエキシビジョンやったし。だから、僕一番大変だったのは2006年のトリノの直後の荒川が金メダル取ったときの東京公演の後、長野へ連れてきたんですけど、ビッグハットでやって8000人客入れたら怒られましたけど、消防に、6000人しか入らないところに入れちゃったら怒られましたけど。とか、1周年、2周年、多分5周年ぐらゐまでは公式的な行事があったんですよ。10周年やったかな。僕のとときに、最後に、10周年、2008年、それが多分最後だと思うんですけど、いわゆる公式に組織委員会っていうか、オリンピック・ムーブメント推進協会とか県とかが協賛する形でやったのが。で去年は一応20周年って形でやりましたが、あのオリンピック・ムーブメントが余剰金を全部使った段階で解散してからはおとなしくなりましたよね。

- 12) 小倉和夫「1998長野パラリンピックが残したもの」『日本財団パラリンピック研究会紀要』第3号、2015年、pp.1-32。

(受理日：2021年4月26日)